

プロジェクト名： 英語前置詞の文法機能・談話機能とその認知的な基盤に関する研究

プロジェクト代表者： 大谷直輝（英語教育開発センター・助教）

1. 研究背景

言語とは形式と意味が結びついた記号の体系である。ただし、言語の形式と意味には必ずしも一対一の対応関係があるわけではなく、多くの場合、一つの形式に対して複数の意味が結びついている（例えば、『リーダーズ英和辞典』では、動詞 *run* に対して、25 種類の意味が載っている）。このような対応関係は多義性と呼ばれる。近年、言語学において意味の主観的な側面が注目され、また、コーパスをはじめとした言語データが整備されたことによって、語彙の多義性が盛んに研究されている。理論的な面では、1980 年代に George Lakoff や Ronald Langacker を中心にして誕生した認知言語学によって、語彙は本質的に多義的という点が広く認識され、中心的・具体的意味から拡張的・抽象的意味への意味拡張の経路や、互いに関連した複数の意味を動機づける認知的な基盤が分析されてきた。また、データや方法論の面では、コンピュータの発達に伴い言語コーパスが普及して、語句が用いられる文脈を大量に扱えるようになったことから、言語使用に注目した文脈重視の多義研究がなされてきた。この文脈重視の立場によって、従来は語彙の多義性として論じられてきた意味の多くは、語彙が内在的に持つ静的な特徴ではなく、語彙の文脈内での使用によって生じる点が論じられた。

2. 研究目的

本研究では、これまでの多義性の研究でほとんど注目されてこなかった、文脈の中から生じる英語前置詞の文法機能や談話機能を分析する。従来の多義研究は意味論レベルの研究が多く、中心的な意味から抽象的な意味への拡張が分析されてきた。一方、本研究では、文脈の中から生じる前置詞の文法機能と談話機能に注目することで多義研究の射程範囲を広げる。具体的には、以下の二点の研究を行う。

- (1) 前置詞が表す文法機能や談話機能を記述する。
- (2) 前置詞が表す文法機能や談話機能を動機づける認知的な基盤を考察する。

この二点に注目することで、従来は意味論の範囲に留まっていた多義性研究を、語用論的・談話的な観点から分析する。また、理論的には、文法機能や談話機能を動機づける基盤としての身体性に注目をする。つまり、語彙の意味拡張と機能的な変化は同時に起こり、身体性をはじめとする同一の基盤によって動機づけられる点を明らかにする。

3. 研究方法

本研究では、質と量の両面から前置詞の文法機能と談話機能の分析を行う。

- (1) 質的な研究方法：基本的な語彙関係である類義性や反義性に注目して、それらの語句を含む例文の比較・考察を行う。
- (2) 量的な研究方法： *British National Corpus (BNC)* と呼ばれる一億語規模のコーパスを用いて、語彙の振舞いを、頻度と文脈に注目して分析する。

4. 研究成果

4.1 量的な研究（業績 [5], [6]）

言語コーパスから網羅的に抽出した類義語や反義語に対して、文法的・意味的・談話的な変数を付与し、その相互関係を考察することで、定量的な意味分析を行った。第一に、Stefan Th. Gries 教授との共同研究で、BP (=Behavioral Profile) アプローチと呼ばれる定量的な多義性の分析モデル

を用いて、*large-big-great* と *small-little-tiny* という反義語の対を分析し、類義語と反義語間に見られる文法や意味における類似点と相違点を調べた。第二に、前置詞、後置詞、接続詞として用いられる *notwithstanding* を分析して、前置詞、後置詞、接続詞の品詞的な機能を考察した。

4.2 質的な研究（業績 [1], [7]）

文脈の中から生じる前置詞の文法機能を、反義関係に注目して分析した。第一に、仮定法の帰結節を導くという *under* の文法機能を *over* との比較を通じて分析した。特に、*under* と *over* は共に空間的な意味から派生した支配的意味を持つものの、*under* のみが文脈内で仮定法の帰結節を導く文法機能を持つという非対称的な意味拡張を論じた。第二に、動詞が表す事態の最終的な状態を表す完了の *up* と *down* に見られる三点の異なる特徴を考察して、*down* に比べて *up* は文法化が進み、完了マーカ儿的な特性を見せる点を示した。

4.3 方法論の普及と応用（業績 [2], [3], [8]）

これまでの分析で用いた独自の分析手法を、認知言語学の方法論の入門書『認知言語学研究の方法』で紹介した。具体的には、*BNC* を用いて、コーパスからデータを抽出する方法、抽出したデータにタグ付けを行う方法、処理したデータを分析する方法などを紹介した。また、前置詞の分析に用いた方法論を日英語の様々な現象の分析に応用した。まず、量的な面では、日本語の人称詞「こいつ・そいつ・あいつ」における指示対象の拡張を定量的に調べた。また、質的な面では、反義語を含む文の最小対を比較するという方法論を用いたワークショップを開催した。

5. 研究業績

研究論文

- [1] 大谷直輝 (近刊) 「条件節を導く *under* について: 文法化と身体性の観点から」『日本認知言語学会論文集』 11
- [2] 小川典子・澤田淳・大谷直輝 (近刊) 「日本語の人称詞の指示対象の拡張に関するコーパス分析」『関西言語学会プロシーディングス』 30
- [3] 大谷直輝 (2011) 「*BNC* に基づく言語研究」辻幸夫 (監) 中本敬子・李在鎬 (編) 『認知言語学研究の方法』 197-211 東京: ひつじ書房
- [4] 大谷直輝 (2010) 「前置詞」澤田治美・高見健一 (編) 『ことばの意味と使用: 日英語のダイナミズム』 104-114 東京: 鳳書房
- [5] Gries, Stefan Th. and Naoki Otani (2010) “Behavioral profiles: a corpus-based perspective on synonymy and antonymy,” *ICAME Journal* 34, 121-150.

研究発表

- [6] Otani, Naoki and Nathan Krug 2010. “The discourse functions of dependent clauses and phrases: A usage-based analysis of synonymous constructions,” *CSDL/ESLP 2010*, University of California at San Diego, September 16-19, 2010.
- [7] Otani, Naoki 2010. “A cognitive study of the aspectual function of the particles *up* and *down*,” *ELSJ International Spring Forum 3*, Aoyama Gakuin University, 24-25 April 2010.
- [8] 有光奈美・徐蓮・大谷直輝・澤田淳・阿部宏 2010. 「対比・非対称性・意味の拡張メカニズム」日本認知言語学会(第11回)、立教大学、2010年9月11-12日
- [9] 小川典子・澤田淳・大谷直輝 2010. 「日本語の人称詞の指示対象の拡張に関するコーパス分析」関西言語学会(35回)、京都外国語大学、2010年6月26-27日